

## 四 戦い後の城主、武将の動向

・岩倉城主織田信賢は慶長六年（一六〇二）、土佐藩主の山内一豊に迎えられ余生を送ったともされている。山内一豊の父盛豊は岩倉の家老で、黒田城の城主であったが岩倉城落城の時、討ち死にしたと伝わる。

・信安の家老の福田大膳正は、犬山の織田信清軍を五坊野に迎え奮戦したが、深手を負い、血刀を杖に五明にたどり着き、一軒の農家に転がり込んだ。農家の主人は事情を聞き、大膳の家族に知らせ介抱したが、その甲斐なく息を引き取った。家族は、家屋敷も焼き払われ帰るあてもなく、そのまま五明に地付いた。平成二十五年現在、五明の福田姓は四十三軒である。

・岩倉城の三奉行の二人の前野宗康は、岩倉落城後、在所である前野村の南窓庵に蟄居した。宗康には、雄吉、長康、勝長の三人の子があった。この前野家三兄弟は織豊期において、それぞれの立場で活躍している。また、三兄弟以外の一族の活躍は江南市史に詳しく記述されている。

・岩倉方の武者奉行、侍大将前田右馬允兼利（加賀藩主前田利家の叔父）と長男源介は浮野の戦いで討ち死にしている。丹羽玄塘の「尾張塘叢」に「織田伊勢守侍大将前田左馬（右馬）允戦死。丹羽郡花地村（古奈良地内花地ト天正ノ記アリ）打死場所郷西野ニアリ」とある。

なお、右馬允の三男續義は、江南市の安良の前田一族の元祖で、安良の前田姓は、江戸時代は二十七軒、平成二十五年現在は、四十九軒となっている。

・林弥七郎は二宮市浅野の住人で、信賢の家臣のうちで随一の弓の名手であったが、旧知の間柄である鉄砲の名手橋本二巴（信長の鉄砲指南役）と、弓矢と鉄砲で「騎打ちし、弥七郎は死亡、巴は大怪我をしたと伝えられている。

・犬山城主織田信清は浮野合戦、永禄四年の美濃侵攻に際して、信長に全面加勢しているが、その後、不和となり信長と敵対する。永禄七年（一五六四）八月（諸説有り）、信長は犬山城を攻略。信清は甲斐に逃れ、犬山鉄斎と号し、武田信玄のお伽衆となる。

# 浮野合戦場址

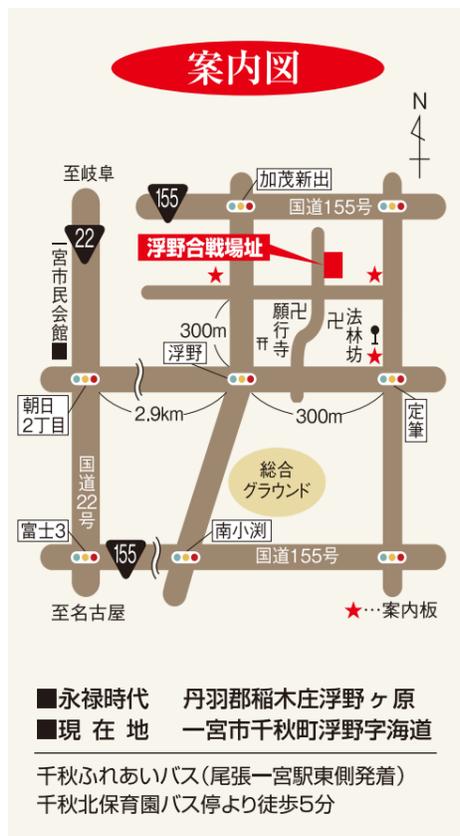


## 五 民衆の生活とその動向

信長の岩倉方への攻撃は、浮野合戦の犠牲が大きかったためか、その後は戦場らしい戦場はせず、岩倉城を裸城にすると近辺の焼き打ちを行なった。かかる兵火によつて焼失した寺院や民家の数はおびただしいものであった。それからの復興にあつても信長の圧迫は厳しかった。一部は帰順して清須へ移った者もあつたが、反骨的な有力者は他に離散した。岩倉城が落城したのは翌年の永禄二年である。

浮野合戦は、浮野・熊代・花地・勝栗五明の二帯にわたつた戦いで、浮野の戦い、天正の兵火により焼失した五坊野五ヶ寺は、その後、瑞仁寺は加茂に、徳法寺は勝栗に、浄蓮寺は塚本に、法林坊は浮野に、そして、圓光寺は中島郡神戸村に再興され、その後、野府城跡の所在地（二宮市開明）に移転し、五ヶ寺それぞれ現在に至っている。五ヶ寺の中の三ヶ寺は石山合戦に参陣している。また、徳法寺の南に削栗神社と五坊の由緒を記した碑「山神」があり、当時の歴史を伝えている。

住民の多くも家を焼かれ田畑を荒らされ困窮したことは想像できる。現在の集落は、その後整備されたもので、往時を偲ぶ古井戸が各地で発掘され、工事や田畑の耕作などで陶弾や焼物が採集されることもあり、当時の丹羽郡千秋村立千秋北小学校では武具等が陳列されていた。浮野村庄屋原喜右衛門稲城は「浮野旧跡夢物語」等で浮野村のことについて詳細に伝えている。（新編「宮市史資料編十」）



## 浮野合戦場址碑文

永禄元年五月二十八日 二千余騎をひきいた織田信長は 岩倉城主織田伊勢守信安を攻撃のため浮野へ陣を進めた  
この日は小競合いの瀬踏み程度に終わったが ついで七月十二日 犬山城主織田十郎左衛門が千騎ばかりを従えて馳せ加わつたので 総勢三千余騎が浮野を中心に争い 死闘二刻に及び首級九百余を討ち取つた これを浮野合戦と呼び この首級を埋めた地（通称 浮野首塚）に建碑した

昭和三十九年春

一宮市長 伊藤 一

### 鶯塚（通称 浮野首塚）

この名称は、北方代官所調役丹羽玄塘の「尾張塘叢」の中の「浮野村古城 鶯ヶ池城址傍にあり 元三畝」に由来する。



織田信長



尾張名所図会

